

Title	リカードオの外国為替論
Sub Title	Ricardo's theory of foreign exchange
Author	安井, 孝治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.9 (1957. 9) ,p.806(38)- 825(57)
JaLC DOI	10.14991/001.19570901-0038
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570901-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカアドオの外国為替論

安井孝治

まえがき

リカアドオの比較生産費の原理は、交易条件の決定される限界を明らかにしたのみであって、交易条件がいかなる要因に依っていかなる点に決定されるか、を明らかにするものではなくて、交易条件の決定はJ・S・ミルの相互需要の原理に依って究明されたのである、といわれている^(注1)。換言すれば、リカアドオの理論には国際均衡論が存在しないのであって、国際均衡論はミルに依って解明されたのである、というのが一般に認められてきた見解である。しかるに最近、わが国においてリカアドオの比較生産費の原理を金を導入することに依って新しく解釈しようとする試みにおいて、あるいはそれのみにとどまらず更にリカアドオの理論にも国際均衡論が存在することを積極的に論証しようとする試みにおいてすぐれた見解が発表されている^(注2)。事実、リカアドオの外国貿易論を解釈しようとする際に従来行われてきたようにリカアドオの「経済学及び課税の原理」

の第七章「外国貿易論」における有名な比較生産費例、即ちゴンナー版の四十七節における所説のみを主として考察の対象とせず、「原理」の第七章の全体、即ちゴンナー版の四十六節から五十三節迄を統一的に考察すると、明らかにリカアドオの理論にはそれなりの国際均衡論が存在すると考えられるのである。このようなリカアドオの国際均衡論が従来、解明されなかったために、古典学派の為替理論乃至はトランスファー理論の学説史的考察に於て、可成りの混乱が存在しているように思われる。リカアドオの国際均衡論を展開し、これとの関連に於てこれ等の問題を考察することが本稿の課題である。

(注1) G. Haberler, The Theory of International Trade, p. 145. J. Viner, Studies in the Theory of International Trade, p. 446.

(注2) 新庄博氏「貨幣論」(岩波全書)六八一―九頁、小島清氏「リ

カアドオの国際均衡論」(一橋論叢第二十四巻第一号)

一

リカアドオの「経済学及び課税の原理」の第七章「外国貿易論」の冒頭には次の如き命題がある。

「外国貿易の拡張は、商品量、従って享楽額の増加には極めて強く貢献するであらうけれども、而かもそれは、決して直ちに一国内に於ける価値の総額を増加せしむるものではない。」^(注1)——引用(イ)

この命題は、外国貿易が行われる場合に超過利潤が発生するが、それは一時的であり、やがて利潤率はもとの水準に低下し、したがって一国における価値の総額——資本及び労働の総量——は不変である、ということ、そしてそれと同時に輸入品の相対価値が低下し、それに依って一国全体の商品量——享楽額——が、したがって一国全体の富の総量が増加するということを意味しているのであるが、このことこそリカアドオの国際均衡論の性格を端的に表明するものであって、この命題はリカアドオの国際均衡論の解明にとって決定的な重要さをもつのである。

ところが、従来リカアドオの外国貿易論について考察する場合に、この命題に対して十分な注意が払われることなく、ただかの有名な比較生産費例、すなわちゴンナー版の四十七節の所説のみが考察の対象とされてきたのである。

「一国内に於て諸商品の相対価値を支配する同じ規則は、二国若

しくは其以上の国の間に交換される諸商品の相対価値を支配するものではない。」^(注2)——引用(ロ)

「イギリスは羅紗を生産するには一年間一〇〇人の労働を要し、また葡萄酒を醸造しようとするならば、同一時間に互って二〇人の労働を要するが如き事情の下に在るものとしよう。従ってイギリスは葡萄酒を輸入し、而して羅紗の輸出に依って之を購ふことを利益とするであらう。

ポルトガルに於て葡萄酒を生産するには、一年間僅に八〇人の労働を要し、また同じ国に於て羅紗を生産するには、同時に互って九〇人の労働を要するものとしよう。従ってポルトガルに於ては、羅紗と交換に葡萄酒を輸出するのが有利であらう。この交換は、ポルトガルの輸入する商品がポルトガルに於てイギリスに於けるよりも少量の労働に依って生産することができるときに於ても、猶ほ行はれるであらう。ポルトガルは羅紗を九〇人の労働を以てつくり得るに拘らず、猶ほこの国はそれを、その生産に一〇〇人の労働を要する国から輸入するであらう。何となれば、ポルトガルに取っては、その資本の一部分を葡萄栽培から羅紗の製造に割いて生産し得べきよりも、一層多くの羅紗をイギリスから交換によってもたらすところの葡萄酒の生産にその資本を投ずる方が有利であるからである。」^(注3)——引用(ハ)

これがゴンナー版の四十七節において論及されているリカアドオの比較生産費説に關してしばしば引用されている有名な言葉である

イギリス	100人	ポルトガル	90人
羅 紗	120人	葡 萄	80人

が、ここに述べられている比較生産費例のみが考察の対象とされる場合には、リカードは交易条件の決定される限界のみを明らかにしたのである、という見解が当然のこととして導かれるであろう。すなわち、イギリス及びポルトガルの二国に於て、貿易開始前に於ける比較生産費は第一表の如くであるから、二国間に貿易が開始されると、羅紗はイギリスから輸出されポルトガルに輸入されることになり、葡萄酒はポルトガルから輸出されイギリスに輸入されることになるであろう。だが、この場合イギリスの羅紗とポルトガルの葡萄酒とが相互に交換される割合はいかに決定されるか。当然、それはイギリスにおける羅紗と葡萄酒との交換比率である $1:100$ を上限とし、ポルトガルにおける羅紗と葡萄酒との交換比率である $1:120$ を下限とする限界内に決定されることになる。換言すれば、羅紗と葡萄酒との交易条件は葡萄酒一単位に対して羅紗二・二単位と羅紗〇・八八単位との間に決定されることとなり、この限界内に交易条件が決定されるかぎり、イギリスもポルトガルも共に貿易上の利益を得ることが出来るわけである。したがって交易条件が決定される限界のみは明らかにされるけれども、この限界内のいかなる点に、いかなる要因に依って、交易条件が決定されるか、ということとは説明されていないということになる。このことはリカードの

比較生産費例のみが考察の対象とされた場合に導かれる当然の帰結なのであるが、ここから直ちに、リカードは国際均衡論を説明しなかつた、と結論することはできないであろう。更に「原理」の第七章全体の叙述を統一的に理解することが必要であると考えられる。

「金及び銀が流通の一般的媒介物に選ばれているので、これらの金属は、商業上の競争により、かゝる金属が全く存在せずして、諸国間の貿易が純然たる物々交換であった場合には行はれる筈の自然的取引に適應するやうな割合に於て、世界各国の間に分配されるのである。」——引用(二)

この命題にはじまるゴンナー版の四十八節、四十九節及び五十節はリカードの外国貿易論の中核をなすものである。ここで、リカードは金(貨幣)を導入して国際均衡論を貨幣経済的に展開しているのであるが、ここでの貨幣的な説明は独立に行われているのではなくて、上述の引用(一)及び(二)の内容と関連して考察されるべきである。すなわち、第一表の如き比較生産費構成のもとに二国間に貿易が開始されてから、比較生産費の均等が成立し国際的均衡に到達する迄の過程が、ここでは金、為替相場を導入して貨幣経済的に説明されているのである。したがって、本稿に於ける次節以下の考察の中心もここにおかれるであろう。

つづく五十一節から最後の五十三節迄は、諸国に於ける貨幣の比較的価値について述べられている。リカードはここで成立した国

際均衡の貨幣的規定を与えているのであるが、それは諸国に於ける貨幣の比較的価値の相違ということである。

「社会の技術と改良とが進歩して、諸国民が各々特殊の製造に長ずるに至れば、……貴金属の価値は、主としてこれ等製造業の優劣によって左右されるであらう。」

「何れか特定の一国が製造工業に秀いで、その結果として、その国への貨幣流入を惹き起す場合には、その国に於ては他の何れの国に於けるよりも貨幣の価値は低く、穀物及び労働の価格は相対的に高いであらう。」——引用(ホ)

外国貿易の発生、それに伴う金の国際的移動は各国民経済の總体的調整を惹き起す。外国貿易の拡張に依って、製造工業の発達した生産能率の高い国には金が流入することになる。したがって国際的均衡が成立した際には、その国の貨幣価値は、国内的には相対的に、国際的には比較的低下することとなる。リカードに依れば、このような貨幣の比較的価値の低下は富国の特徴であって、輸入品の相対価値の低下→交易条件の有利化にもとづく一国全体の富の増加を——一国の価値の総額は不変であるが——意味するものと考えられているのである。これがリカードの結論であるが、このことは、リカードの冒頭の根本的命題——引用(イ)——の内容と一致するのである。ここでの貨幣の比較的価値の命題——引用(ホ)——が、国際均衡の貨幣的規定であるならば、根本的命題——引用(イ)——は国際均衡の実質的規定であり、両者の命題は内容に於て

全く一致するのである。

以上を要約すれば、基礎原理「引用(ロ)」にもとづき、比較生産費例「引用(ハ)」によって国際貿易の発生が明らかにされ、金(貨幣)を導入して国際貿易の推移が貨幣経済的に展開され、国際均衡の成立が説明される「引用(ニ)」。このようにして到達された国際均衡の貨幣的規定が引用(ホ)で与えられ、実質的規定が引用(イ)で与えられており、両者はその内容に於て一致するということになるのである。

以上がリカードの「原理」の第七章に論及された外国貿易論の構造の概略であるが、このように第七章全体の構造を統一的に理解するならば、リカードの理論にも国際均衡論が存在していると考えられるのである。次節以下に於て、まず最初にリカードの国際均衡論を検討することとしよう。

(注1) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gomer's ed., 1924, p.108. 小泉信三氏訳「経済学及び課税の原理」(岩波文庫) 上巻一二五頁。
 (注2) Ricardo, Principles, p. 113. 小泉氏訳 上巻一三二頁。
 (注3) Ricardo, Principles, p. 115. 小泉氏訳 上巻一三三頁。
 (注4) Ricardo, Principles, p. 117. 小泉氏訳 上巻一三五頁。
 (注5) Ricardo, Principles, pp. 124-5. 小泉氏訳 上巻一四三頁。

二

リカードオの説くところに依れば、完全競争の行われる一国内に於ては資本及び労働の自由移動が行われるから、諸商品の相対価値の尺度を投下労働量に求めることができるが、国際間には資本及び労働の自由移動が行われないから、一国内に於て商品交換を規制する価値法則は国際交換にはそのまま妥当するものではない。すなわち、各国の価値体系はそれぞれ独立なのであって、このような価値体系の独立の認識から前節の引用(ロ)の命題が提起され、そこから比較生産費の命題——前節引用(ハ)——が与えられる。だがここで与えられた比較生産費例——前節第一表——は、各商品の生産費がイギリス及びポルトガルに於て生産に必要な投下労働量に依って表現されている。しかし、イギリスの価値体系とポルトガルの価値体系とはそれぞれ独立であるから、これら独立の価値体系を相互に結び付ける連結環が必要となるのであって、かかる連結環として金がとりあげられなければならない。そしてリカードオの比較生産費例を金との関連に於て考察しようとする意図もこの点の認識から生ずるものに他ならないのである。

さて、リカードオの比較生産費例を金との関連に於て考察する場合に、先ず前節第一表の如き比較生産費表に金がどの様に導入されるべきか——このことは国際交換において金がいかなる意味をもつ

か、ということと直接関連することであるが——が明らかにされなければならない。蓋し、この点に関して異なる二つの見解が存在するからである。先ず第一の見解に依れば、金は羅紗や葡萄酒と同じように国際的に輸出入される一商品として第一表の如き比較生産費構成に参加するものと考えられている。すなわち、金の一定量(例えばグラム)を生産するに必要な投下労働量をイギリスに於ては八〇人、ポルトガルに於ては八〇人とすれば、この見解からは第二表の如く三財から構成された比較生産費表が導かれることになる。^(注10)

ところが、第二の見解に依れば、金は輸出入の対象となる一般商品とは明確に区別された貨幣^{II}国際的決済手段としてとらえられ、国際交換は直接交換の形態ではなくて貨幣を媒介とする間接交換の形態で考えられるべきものとして、第三表の如き比較生産費表が考えられており、ここでは国際貿易の輸出入は必ず商品と金との交換の形態をとって進行するものとされている。^(注11)

第一表の如き比較生産費表に金を導入することに依って、前者の見解からは第二表が、後者の見解からは第三表が導かれるのであるが、この場合、実質的關係のみが問題であるならば第二表も第三表もいずれも内容は同一であり、両者はたんに表現の相違にすぎないと考えられるかもしれない。しかし、貨幣経済的に考察する場合に

は金の意味、したがって金の比較生産費表への介入の仕方の相違は

	ガル	ポルト	イギリス
第三表	90人	80人	100人
イギリス	80人	80人	100人
ポルトガル	80人	80人	100人
イギリス	100人	100人	100人
ポルトガル	100人	100人	100人
イギリス	100人	100人	100人
ポルトガル	100人	100人	100人

当然問題とされなければならない。国際均衡論を貨幣経済的に展開するという場合、「貨幣経済的」とはいかなる内容をもつべきであろうか。金を導入することに依って、一定量の金の生産に必要な投下労働量を媒介として、各商品の生産に必要なとされる投下労働量をもって表現された各商品の実質的生産費を貨幣タームに表現し直すことは容易であるが、それだけでは単に表現の様式を変えただけであって決して貨幣経済的な取扱いはいえないであろう。貨幣経済的に国際均衡論を展開するとう場合には、国際均衡が成立するに至る過程に於ける貨幣的メカニズム——外国為替の機構——が明らかにされなければならないであろう。したがって、比較生産費表に金を導入するにしても、商品としての金ではなくて、貨幣^{II}国際的決済手段としての金が導入されなければならない。国際金本位制度の下に於て金は貨幣であると同時に商品でもあるが、貨幣としての金と商品としての金の性質の相違は明確に区別されなければならないのである。

ところで、リカードオは国際均衡論を論ずる際に金をどのような意味でとりあげていたかというに、「原理」の第七章においては、金が羅紗や葡萄酒と同様に輸出入される一商品としてのみ考えられて

いたのではない、ことは明らかである。

「金及び銀が流通の一般的媒介物に選ばれている……」^(注12)「羅紗がポルトガルに輸入せられるのは、それがこの国で、輸元の国で費されるよりも多量の金に対して売られるのでなければあり得ぬことであり、また葡萄酒がイギリスへ輸入されるのは、それがイギリスでポルトガルで費されるよりも多量の金に対して売れるのでなければあり得ぬことである。」^(注13)

リカードオは、貨幣としての金と商品としての金との性質の相違を明確に理解することができず、そこから又外国為替の機構について正確な説明を与えることができなかつたことは後述の如くであるけれども、とも角、一応金が貨幣^{II}国際的決済手段として考えられていたことは右の引用から明らかである。

以上の考察から、リカードオは貨幣経済的に国際均衡論を展開したのであるといて第二表の如き比較生産費表を導くことは二重の意味に於て不十分な考察であることが明らかである。第一に、それは投下労働量で表現された実質的生産費を貨幣タームで表現することは可能であっても、国際均衡における貨幣的メカニズムについての考察を排除するものである、という意味において貨幣経済的な展開ではあり得ない。第二に、それは、金が羅紗や葡萄酒と全く同様な意味において輸出入の対象となる一般的商品であると考えるのであるが、金をこのような意味にのみ解することは、「金が流通の一般的媒介物となつていふ」というリカードオの見解と矛盾する。

故に、第一表を金との関連において考察し、リカードオの国際均
衡論を貨幣経済的に説明しようとする場合には、われわれは第二表
ではなくて第三表をとりあげなければならぬ。

- (注1) 小島清氏「前掲論文」
- (注2) 新庄博氏「前掲書」六九頁。
- (注3) Ricardo, Principles, p. 117. 小泉氏訳 上巻一三五頁。
- (注4) Ricardo, Principles, pp. 117-8. 小泉氏訳 上巻一三
五頁。

三

理論的考察の出発点となる比較生産費表が決定されるならば、こ
こからリカードオの国際均衡論を展開することができる。第四表の
左側の(a)表は、考察の出発点において与えられる比較生産費表であ
るが、この比較生産費表は本質的に前節の第三表と同じものであ
る。この(a)表は、貨幣の価値が金の価値に等しいという関係から容
易に貨幣価格によって表現されうる。即ち、イギリスの本位貨幣単
位(£₁)の価値は、245グラムの金と等価であり、ポルトガルの本位
貨幣単位(£₂)も245グラムの金と等価であるとすれば、イギリ
スでは金の一定量(245グラム)が一〇〇人の労働で生産され、ポル
トガルでは同じく245グラムの金が八〇人の労働で生産されるのであ
るから、双方の関係から各国において投下労働量で表現された実質
的生産費を貨幣価格で表現することができる。このようにして第四

表の左側の(a)表を貨幣価格で表現したものが右側の(b)表である。も
ちろん、(a)表も(b)表も内容は同一であり、ただ表現の様式が異なる
のみである。

第四表

(a)		ポルトガル		(b)		ポルトガル	
イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル
羅紗	100人	90人	£ ₂ 50	羅紗	£ ₁ 45	£ ₂ 50	£ ₂ 45)
金	100人	80人	£ ₁ 45	(金	£ ₁ 45	£ ₂ 45)	£ ₂ 45)
葡萄酒	110人	80人	£ ₁ 50	葡萄酒	£ ₁ 50	£ ₂ 45	£ ₂ 45)
金	100人	80人	£ ₁ 45	(金	£ ₁ 45	£ ₂ 45)	£ ₂ 45)

更にイギリス及びポルトガル両国の
価値体系乃至は価格体系を相互に結び
つける連結環としての為替相場が設定
されなければならぬ。リカードオに
依れば、為替相場は「一国通貨の価値
を他国の通貨で測ることによって確め
られる」のである。すなわち各国の本
位貨幣単位にふくまれる金の量の比率
が為替相場である。ここでは、イギリ
スの本位貨幣単位(£₁)もポルトガルの
本位貨幣単位(£₂)も共に等量の金
(245グラム)をふくんでいるから、
イギリスとポルトガルとの間の為替相
場は、£₁ = 1.125 £₂ となる。そしてこ
のような為替相場が設定されるならば
イギリスとポルトガルの価格体系は相互に結びつけられ、商品の絶
對価格差にしたがって両国間に国際貿易が開始されることになるわ
けである。第四表の(b)表に於ては、イギリスからの羅紗の輸出は
£₁の利潤を生じ、又ポルトガルからの葡萄酒の輸出は同じく£₂の

の利潤を生ずるであろう。

「イギリスにおいて……葡萄酒価格は一樽五〇磅、羅紗の一定量
の価格は四五磅であり、一方ポルトガルにおいて、葡萄酒の同一
量は四五磅、羅紗の同一量は五〇磅なりしものと仮定すれば、葡
萄酒は五磅の利潤を以てポルトガルから輸出され、羅紗も同額の
利潤を以てイギリスから輸出されるであらう。」

この場合には雙方的貿易が行われ、国際的決済は金の国際的移動
を惹き起すことなく為替手形に依って
決済される。

第五表

(a)		ポルトガル		(b)		ポルトガル	
イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル	イギリス	ポルトガル
羅紗	100人	90人	£ ₂ 50	羅紗	£ ₁ 45	£ ₂ 50	£ ₂ 45)
金	100人	80人	£ ₁ 45	(金	£ ₁ 45	£ ₂ 45)	£ ₂ 45)
葡萄酒	100人	80人	£ ₁ 45	葡萄酒	£ ₁ 45	£ ₂ 45	£ ₂ 45)
金	100人	80人	£ ₁ 45	(金	£ ₁ 45	£ ₂ 45)	£ ₂ 45)

次にリカードオはイギリスに於て葡
萄酒の醸造上の改良が行われたと仮定
して、比較生産費が変化した場合につ
いて考察している。

「仮りに改良の行はれた後に、葡
萄酒はイギリスで四五磅に下落し、羅
紗は引き続き同一価格に在るものとしよ
う。」

かかる事態は第五表で示されるであ
らう。第四表においては、イギリスにお
いて葡萄酒の生産には一〇〇人の労働
が必要であり、その貨幣価格は £₁ 50
であったが、イギリスにおいて葡萄酒

の生産に改良が行われたために、第五表ではイギリスの葡萄酒生産
にはより少量の労働、一〇〇人の労働が必要とされるのみであり、
その貨幣価格も四五磅に下落しているのである。

このような事態になると、羅紗は引き続きイギリスから輸出され
るが、葡萄酒はもはやポルトガルから輸出されない。かくてポルト
ガルからイギリスへ金の流出が生ずることになる。だが、リカード
オの体系においてはいかにして金の流出が発生するか。

「併し葡萄酒の価格が、仮りに葡萄酒の金くイギリスに向つて輸
出され得ないやうなものであつても、羅紗の輸入者は同じく手形
を買うであらう。併し手形の売手が、以て結局二国間の取引を決
済すべき出合手形の市場にないことを承知してあるから、その手
形の価格は高くなるであらう。彼はその手形と引換に受取った金
貨若しくは銀貨を、実際にそのイギリスの取引先に宛てて輸出し、
以てその取引先が、彼が与へた権利に基づいてなされるべき支払の
要求に応じ得るやうにしなければならぬことを承知してあるであ
らう。従つて、彼はその手形の価格中に負担せらるべき一切の費
用と並に相当且つ通常の利潤とを請求するであらう。」

今若しこの対英為替手形に対する打歩が、羅紗の輸入に対する
利潤に等しきものであつたならば、輸入は無論止むであらう。然
るに、若しも手形に対する打歩は僅かに二歩であつて、イギリスに
於ける一〇〇磅の債務を弁償し得んが為には、ポルトガルに於て
一〇二磅を支払うことを要するのに、一方四五磅の費用のかゝる

羅紗は五〇磅に売れるならば、羅紗は輸入せられ、手形は買われ、貨幣は輸出せらるべく、斯くして遂にポルトガルに於ける貨幣の減少、イギリスに於ける貨幣の累積が、この取引の継続を最早有利ならしめぬやうな価格状態を惹起するであらう。(傍点筆者)

これがリカードオの金の流出機構に関する説明であるが、一見するとこの説明は典型的金本位制度下における金流出の機構をそのまま叙述しているかの如く思われる。したがってそのように解釈する見解もあるが、ここでリカードオの説明は金本位制度下の現実にみられる金流出機構とは全く相違するものであることは明らかである。右の引用の傍点部分に注意されたい。片貿易になった場合、最初の傍点部分に於ては外国為替手形に対する一方的需要の発生が、第二の傍点部分では金の流出と為替相場の金輸出点への騰貴との同時的発生が指摘されているのであるが、更に最後の傍点部分に於ては、これらの事態、即ち、最初の傍点部分に示される事態と第二の傍点部分に示される事態とが同時に発生すると考えられている。もちろん、金本位制度下の現実に於ては、右の最初の傍点部分に於ける事態の発生と第二の傍点部分の事態の発生との間には、輸出入関係の変動、為替の需給関係の変動を伴う一連の為替相場変動の過程が存在し、この過程が継続的に行われた結果、為替相場が金輸出点を割るに至った場合に初めて金の流出を見るのである。リカードオの説明では金現送点内に於ける為替機構に関する説明がとりあげられていないのである。リカードオがこのような結論を導くに

至った理由として、われわれは先ず何よりも、リカードオは金が貨幣であることを指摘しながらも、金本位制度の下において貨幣制度にとり入れられた金、国際的決済手段としての金の性質を明確に理解しなかつたこと、そしてそれと関連することであるが、リカードオが為替は債務の支払手段ではないと考えていたことが指摘されるであらう。尚、為替理論に関しては国際均衡論との関連に於て後に再び考察することにしよう。

さて、第五表の如き状態に於て片貿易となると、ポルトガルに於ては、対英為替手形に対する超過需要、為替相場の騰貴、金の流出が同時に発生する。金の国際的移動に依つてイギリスに於ては金(貨幣)の増加が、ポルトガルに於てはその減少が生じ、貨幣数量説の命題に従つて、イギリスに於ては金(貨幣)の数量の増加と同一比率で貨幣価値の減少、諸商品の貨幣価格の騰貴が起り、ポルトガルに於ては金(貨幣)の数量の減少と同一比率で貨幣価値の増加、諸商品の貨幣価格の下落が起る。したがって金の移動が継続的に行われるならば、イギリス及びポルトガルの両国に於ける羅紗及び葡萄酒の価格の変動に依り、再び雙方的貿易が可能となる事態が生ずる。例えば、われわれは第六表の如き状態を想定することができる。(注9)

第六表では計算の基礎として三・三パーセントの変動率が仮定されている。金の移動の発生前の第四表及び第五表の状態に於ては、イギリスに於ては、本位貨幣(ポンド)の価値は二・二人の労働量に相当し、賃銀率はポンドであり、又ポルトガルに於ては、

第六表

	イギリス	ポルトガル
羅紗	£ ₁ 46.5	£ ₂ 48.3
葡萄酒	£ ₁ 45	£ ₂ 45
本位貨幣(ポンド)	£ ₁ 46.5	£ ₂ 43.5
労働量に相当し、賃銀率はポンド	£ ₁ 45	£ ₂ 45

(注1参照) 第六表の如き事態では、イギリスに於ては、本位貨幣(ポンド)の価値は二・一五人の労働量に相当し、賃銀率はポンドとなり、又ポルトガルに於ては、本位貨幣(ポンド)の価値は一・八四人の労働量に相当し、賃銀率はポンドとなる。このような貨幣価値の変動が両国に於ける羅紗及び葡萄酒の自然価格を同一率に変化せしめ、このことが両国間の雙方的貿易を可能ならしめるのである。(注10) 第六表では雙方的貿易が可能であるにしても、貿易均衡が成立しない限り、依然として為替相場の騰貴と金流出とは存続するであらう。だが、両国間に雙方的貿易が開始されれば、やがては二国間に貿易均衡が成立することになる。この点に関して、リカードオはいかにして貿易均衡が成立するかという貿易均衡が成立するに至る迄の過程について殆ど説明することなく、やがて到達されるべき貿易の均衡状態のみを規定しているにすぎないのである。

では、リカードオの規定する貿易均衡状態はいかなる状態であるかというに、それは輸入国に於て輸入品の価格が低下し、輸出国の自然価格に等しくなった状態である。このことは「原理」の第二十章に於けるリカードオの次のような叙述から明白である。

リカードオの外国為替論

「穀物は、他のすべての商品と同様に、何れの国に於てもその自然価格、即ちその生産に必要なにして、それだけ支払われなければ之を耕作することが出来ない価格をもっている。その市場価格を支配し、之を外国に輸出するの便否を決するものは、即ちこの価格である。穀物の輸入がイギリスに於て禁止されるならば、その自然価格はフランスにおいて僅かその半分にすぎないのに、イギリスに於ては一クオター六磅に騰貴するかもしれない。もしも此の時に於て、輸入の禁止が除かれたならば、イギリス市場における穀物は六磅と三磅との中間の価格には下落しないで、結局永続的にはフランスの自然価格、即ち穀物をイギリス市場に供給し、しかもフランスに於ける通常普通の資本利潤を提供し、かつ、この価格に下落するであらう。而して、穀物はイギリスの消費する量が十萬クオターであらうと百萬クオターであらうと、この価格に留まるであらう。もしイギリスの需要量が後者であったならば、この多量の供給をなすために品質の劣る土地に頼る必要上、フランスに於ける自然価格は恐らく騰貴し、このことは勿論イギリスに於ける穀物の価格にも影響するであらう。要するに私が主張することは、独占の目的物でない限り、究極において諸商品のその輸入国に於ける売価を左右するものは、輸出国に於けるその自然価格であるといふことに尽きるのである。」(注11)

このようにリカードオは、結局輸入国における輸入品の価格は輸出国における自然価格に落着くことになると明らかに考えているの

第七表

(a)		イギリス		ポルトガル	
羅	100人	紗	87人	羅	46.8
金	96人	金	83人	紗	45
葡萄酒	92人	葡萄酒	80人	金	43.2
金	96人	金	83人	葡萄酒	45

(b)

イギリス		ポルトガル	
羅	46.8	紗	46.8
金	45	金	45
葡萄酒	43.2	葡萄酒	43.2
金	45	金	45

であるが、このことは第六表の状態が結局第七表の如き状態に落着くに至ることを意味する。第七表の如き状態になれば、貿易均衡が成立し、金の移動は止み、為替相場は再び平価(ポンドとマルカ)と一致することになる。これがリカードオの説く国際均衡である。第六表から第七表に到達する過程に於てはイギリス及びポルトガル二国間には雙方的貿易と共に金の移動も行われているから、第六表に於けるよりも第七表に於て、より大なる貨幣価値の変動が生じている(注)。したがって第七表の状態では、イギリスに於ては本位貨幣の価値は二・一三人の労働量に相当し、ポルトガルに於ては本位貨幣の価値は一・八五人の労働量に相当し、又ポルトガルに於ては本位貨幣の価値は二・一三人の労働量に相当し、イギリスに於ける葡萄

がて元の一般的水準に下落することを指摘し、更に外国貿易に依って一国の平均利潤率は直接には決して影響を受けないことを詳説しているのであるが、このことは、貿易業に超過利潤が発生すると国内的には国内産業から輸出産業へ資本及び労働の移動が生じ、国際的には輸出供給量の増加が輸入国市場に於て輸入品の価格低下の傾向を生ぜしめ、この国内的及び国際的の雙方の過程が同時に進行し、やがて第七表の如き状態に於て国際的均衡が成立すると同時に国内的均衡も成立することを意味するものに他ならないのである。そしてこのリカードオの国際均衡状態——第七表——が本稿第一節のリカードオの命題——引用(イ)及び引用(ホ)——と内容に於て一致するものであることは言う迄もない。

かくて、われわれは第四表から出発して第七表に到達することに依って、二国間の比較生産費の差異にもとづいて貿易が発生してから、二国間の比較生産費が均等となり国際均衡が成立する迄の過程を明らかにすることができた。リカードオはその比較生産費説によつて、たんに交易条件が決定される限界のみを明らかにしたのではなくて、リカードオの体系には上述の如き国際均衡が存在していることが確認されるのである。だが、リカードオはその国際均衡論に於て、結局において到達されるべき均衡状態については明確に規定しているが、そのような均衡状態に到達するに至る迄の短期的調整過程については殆ど説明を与えていないことに注意すべきである。われわれの例に言え、第六表から第七表に示される均

衡状態に到達する迄の過程について、リカードオは明確な説明を提示することなく、ただ結局は第七表の如き均衡状態に到達するといふことを指摘しているにすぎないのである。国際均衡を説明する場合に於けるこのようなりカードオの考察態度は又リカードオの為替理論にも明白にうかがわれるところであろう。さきに指摘した如く、リカードオは金本位制度の金流出機構を論ずる際に貿易の不均衡が直ちに金の流出を発生せしめるといった説明を与え、その間に介在する為替相場の実質的変動過程を考察外に置いているのである。したがって第六表から第七表の均衡状態に至る迄の貨幣的調整過程はリカードオに依れば、雙方的貿易が行われても貿易の不均衡が存在する限り金の移動が継続的に発生し、やがて貿易の均衡が達成され、金の移動は停止し、為替相場は平価に復帰すると考えられることになるのは当然であつて、しかもそうである限り、第六表から第七表の均衡状態に到達する迄の貨幣的調整過程に於ける為替相場の実質的変動過程は無視され、ただ金の移動が継続し結局は為替相場は均衡相場である為替平価と一致するといふことが言われているにすぎないのである。要するに貿易均衡を説く場合には雙方的貿易が発生し、それに依つて結局に於て到達されるべき貿易均衡状態のみが規定され、そこに到達する迄の貿易の実質的変動過程については十分な考察が払われていないのであり、それと全く同様に、為替均衡を説く場合には金の移動が結局に於て成立せしめると考えられる為替均衡状態のみが規定され、そこに到達する迄の為替相場の

実質的変動過程については十分な考察が払われていないということになるのであつて、このことがリカードオの国際均衡論の特徴である。

以上の如きリカードオの理論と全く対照的な理論はJ・S・ミルの理論であろう。ミルの理論、即ち「相互需要説」に於ては、貿易当事国の輸入需要量の變動が国際均衡化の主要要因として考えられている。したがってミルの理論からすれば、金流出後の均衡化の過程は、金の国際的移動に伴う貿易当事国に於ける一般物価水準の變動に依り、両当事国の輸入需要の變動を惹起し、両国の輸入需要量が均等となった場合に国際的均衡が成立すると考えられているのである。この理論に於ては相互需要の變動を考へることによつて輸出入関係の變動が説明され、それと同時に為替の需給関係を考へることによつて金現送点内における為替相場の變動が説明されているのである。リカードオの理論は主として生産側乃至は輸出側の活動——利潤獲得動機——をとりあげ、超過利潤の消滅する水準で均衡が達成されることを主張するものであり、それは、暗黙のうちに需要側の要因はその時々と与えられている、一定であると考え、金平価を媒介として関連づけられている両貿易当事国の実質的關係——生産要素交易条件——の变化が均衡化の主要要因であるとしているのであるが、これに反してミルの理論では主として需要側の要因がとりあげられ、相互需要の均衡によつて国際均衡の達成が説明されているのである。この点がリカードオとミルの理論的立場の根本的相違点

であるが、このような理論的立場の相違は外国為替理論にもそのまま現われ、リカードオの為替理論は均衡為替相場の理論としての性格をもち、ミルの為替理論に於ては金本位制度下の金現送点内に於ける為替機構について現実的な説明が与えられることになっているのである。

(注1) 第四表に於て、(a)表を(b)表に書き直す場合には、先ず鑄造平価が決定されなければならないが、鑄造平価は本文に示されているところから、イギリスでは $\text{£}1 = \frac{25}{45}$ シェリングの銀、ポルトガルでは $\text{₣}1 = \frac{25}{45}$ シェリングの銀である。ところがイギリスでは金2グラムの生産に必要な労働量は100人であり、ポルトガルでは等量の金の生産に必要な労働量は80人である。したがってイギリスの本位貨幣の価値は $\text{£}1 = \frac{100}{45} = 2.22$ 人であり、貨銀率はその逆数 $\frac{1}{2.22} = \text{₣}0.45$ となるであろう。同様にポルトガルに於ては、本位貨幣の価値は $\text{₣}1 = 1.77$ 人、貨銀率は $\text{₣}0.56$ となるであろう。

尚、(b)表に於ては、(以下に出てくる諸表も同様であるが)、金2グラムの価格がイギリス、ポルトガルに於てそれぞれ $\text{₣}1.45$ 、 $\text{₣}0.45$ として示されているが、ここでは金は単なる商品としてではなくて貨幣＝国際的決済手段として考えられているのであるから、この金の価格は金本位制度の下では不変であり、又金が絶対的価格差にしたがって国際間を移動するにしても、それは為替相

場が金輸出品を割った場合にはじめて可能となることである。したがってここで、比較生産費構成に於ける金のもつ意味は単なる商品としての羅紗や葡萄酒のもつ意味とは異なる。故に金は括弧して、羅紗や葡萄酒と区別しておくことが適当であろう。ここで金の価格は(a)表と(b)表との対応関係を明確に表示するために役立つにすぎない。

(注2) Ricardo, Principles, p. 128. 小泉氏訳 上巻一四七頁。

(注3) Ricardo, Principles, pp. 118—119. 小泉氏訳 上巻一三六—三七頁。

(注4) Ricardo, Principles, p. 119. 小泉氏訳 上巻一三七頁。

(注5) Ricardo, Principles, pp. 119—20. 小泉氏訳 上巻一三八頁。

(注6) 小島清氏「前掲論文」前掲誌三八頁。

(注7) リカードオは次の如く述べている。

「為替手形は、決して、一国が他国に負っている債務の支払手段ではない。それはイギリスに債権を有する人をして、その居住地に居ながらにして、イギリス内の債務者から一定額の貨幣を受取ることを得せしめるものである。それは債務移転の手段であって、債務支払の手段ではない。」(小畑茂夫訳「リカードオ貨幣銀行論集」一九五頁)

リカードオは初期の貨幣論文に於ては、金の貨幣＝国際的決済手段としての性質を理解せず、商品の輸出入と金の輸出入と全く

同視している(拙稿「古典学派トランスファー理論の再検討」三田学会雑誌昭和二十六年五月号三八頁)。このように一般商品の輸出入と金の輸出入と同視されるならば、右の引用に示されるように為替手形は等額の債権と債務の単なる振替手段と解されるのも当然であり、為替相場に関する問題——為替相場の実質的変動過程と金の国際的決済手段としての輸出入機構——は全く考察外に駆逐されることになる。このことと関連して考察されるべきことは、地金論争に於てリカードオは地金主義者の代表者と一般に考えられているけれども、彼は他の地金主義者と見解を異にし、為替の需給関係の変化による為替相場の変動を認めなかったのである(J. Viner, Studies in the Theory of International Trade, p. 139)。其の後、リカードオはマルサス其の他との論争の過程を通じて、若干理論的譲歩をしたようにみえる(J. Viner, *ibid.*, pp. 140—41)。

しかし、リカードオは「原理」に於ても、右の理論的立場から脱却してはいない。リカードオは金を一応貨幣としてとりあげていながらも金の流出機構に関する説明は混乱そのものである。本文中の引用に於てリカードオは為替需給の不均衡が為替相場の変動を惹き起すかの如き印象を与える説明を試みているけれども、リカードオの叙述は決してそのように解釈すべきではない。金本位制度下に於ては為替相場が金輸出点を割れば国際決済手段としては為替手形に金が代替するのであって、リカードオの言う

リカードオの外国為替論

如く為替手形の需要と金の流出が同時に発生することはあり得ない。後述する如くリカードオのこの説明は彼の国際均衡論と両立させるためには都合よくできているが、それは非現実的な説明である。

(注8) 貨幣の価値は金を生産するに必要な労働量によって決定される。「金銀も他の一切の商品と同じく、一に之を生産し、且つ之を市場にもたらすに必要な労働量に比例してのみ価値を有する。」(Ricardo, Principles p. 340. 小泉氏訳 下巻九十一頁)

だが、一国に流通する貨幣の量はその価値に依存し、貨幣流通量と貨幣の価値との正確に反比例的な変動関係が考えられている。

「……一国に於て使用せられ得べき貨幣量はその価値に依存せざるを得ぬ。貨幣流通額は決してあふれる程豊富となることはあり得ない。蓋しその価値を減ずることに依って、同じ割合に於てその数量は増加せられ、またその価値を増すことに依って、その数量は減せられるであらうからである。」(Ricardo, Principles, pp. 340—41. 小泉氏訳 下巻九十一頁)

「併し一国に於ける貨幣の減少と他国に於けるその増加とは、一商品の上のみ作用するのではなく凡ての物の価格に作用するものであり、従って葡萄酒及び羅紗の価格は、イギリスに於ては雙方共に騰貴しポルトガルに於ては雙方共に下落するであらう。」(Ricardo, Principles, p. 120. 小泉氏訳 上巻一三八—九頁)

(注9) 前節の第二表のような比較生産費を出発点にとると、金は羅紗や葡萄酒と全く同じ意味に於て一つの商品として比較生産費構成に参加するから、第六表の如く金の国際的移動が発生しイギリス及びポルトガル両国に於て一般物価水準の変動が生じた場合には、金の価格も又両国に於て同一率の変動を蒙り、かくて発生した両国に於ける金の絶対価格差が、尙一層の金の移動を惹起するかの如く考えられるかもしれない。小島清氏はこのように考えておられる(小島清氏「前掲論文」前掲誌四十三頁)。

しかし、金本位制度の下に於ては、ごく短期的にはありうるかもしれないが、このように永続的に金の価格の鑄造平価以上の騰貴又は鑄造平価以下への下落、すなわち貨幣価値と金の価値との乖離は発生しない。金が貨幣の国際的決済手段として考えられる限り、金本位制度の下に於ては金の価格は鑄造平価によって確定され、金の国際的移動も為替相場が金輸出点を割った場合にはじめて発生するにすぎない(この場合にはじめて金の国際的価格差が発生する)。要するに第二表の如き比較生産費表を出発点にとることは最初から金本位制度に於ける貨幣的メカニズムについての考察を排除していることになる。小島氏はイギリスとポルトガルとの間に最初に片貿易が発生した場合には、為替相場が金輸出点を割って金が流出すると述べ、金の移動は「貿易決済のために為替相場と金輸送点との関係から」発生すると正しい説明を与えながら、他方に於て右に見たような金価格の鑄造平価からの乖離、

それに伴う金の国際的絶対価格差の発生が金の国際的移動を惹き起すといった金本位制度下の貨幣機構とは無関係な説明を与えておられる。氏の論理は完全に矛盾しているように考えられる。

(注10) かかる状態に於ては、金の国際的移動に依って諸商品の自然価格の変化は生ずるが、価値関係にはなんらの変化も発生しない。

「併し乍ら、貿易はこれ等諸国に於て諸商品の生産される自然価値を変更するのではなく、その自然価格を変更することによってのみ規制され得る。而して自然価格の変化は貴金属の分配の変更に依って実現される。」(Ricardo, Principles, p. 330. 小泉氏訳 下巻八十二頁)

(注11) リカアドオは、いかにして貿易均衡が成立するかについて明確な説明を与えていないのであるが、この点に関して、リカアドオは貿易均衡が成立するに至る過程を「商業上の競争」という一句で表現しているとする見解がある。(小島清氏「前掲論文」前掲誌四十三頁)。

この点については後に考察するであろう。

(注12) Ricardo, Principles, pp. 363-4. 小泉氏訳 下巻一六―一七頁。

(注13) 第六表では貨幣価値の変動率を三・三パーセントと仮定したが、第七表の場合には第六表より大なる貨幣価値の変化が発生している筈であるから、貨幣価値の変動率は四パーセントとして

計算されてある。

(注14) このような貿易均衡が成立するに至る迄の過程についてリカアドオが明確な説明を与えていないことは、さきに指摘した如くであるが、この過程を推察するならば恐らく次の如くリカアドオは考えていたように思われる。

リカアドオの理論に於ては輸出業者の利潤獲得動機によって——ミルのような輸入需要の変動に依ってでなく——貿易は促進せしめられる。商品の輸出によって超過利潤が得られるかぎり、輸出国の輸出供給量は増加しつづけるであろう。輸入国の需要状態が貿易の進行中与えられたもの、一定であるとすれば、輸入国に於て輸入量が増加するにつれて輸入品の価格は低下する傾向をもつだろう。そして結局、輸出国の自然価格迄輸入国に於ける輸入品の価格が低下する水準で輸出供給量と輸入需要量とが均衡になるだろう。リカアドオの次の叙述はこのような過程を意味するものと解釈することは許されないであろうか。

「外国市場に影響を及ぼす穀物の供給増加は、また輸出先の国に於ける価格を下落せしめ、延いて輸出者の利潤を、その営業を継続しうる最低率に制限するであらう。」(Ricardo, Principles, p. 286. 小泉氏訳 下巻三十六頁)

「いまある商品の価格が両国ともに二〇ポンドであったが、一方の国では凶作の結果一五ポンドに下落したとしますと、他方の国でもその商品の価格がやはり一五ポンドに下落するまでは、そ

リカアドオの外国為替論

の商品の供給過剰というものは起りえないでせう。」(リカアドオのマルサスへの手紙「中野正氏訳 上巻三四―三五頁」)

四

以上のようなリカアドオの国際均衡論の解明は、リカアドオの為替理論を統一的に理解することを可能ならしめるであろう。リカアドオの外国為替に関する叙述には次のように一見すると相互に矛盾していると考えられるような説明が見出されるのである。

「仮りに貿易の一般的な作用によって定まるイギリスの割当分は一定量目及び品位の地金一千万ポンド・スターリングであるとすれば、紙幣一千万磅が之に代用せられても、それは為替に対しては何等の影響も及ぼさないであらう。然るに、若しも紙幣発行権の濫用に依って一千一百万磅が流通上に使用されたならば、為替相場はイギリスにとって九パーセント不利になるであらう。若しも一千二百万磅が使用されたならば、為替相場は一六パーセント、二千万磅が使用されたならば、五〇パーセント、イギリスに不利になるであらう。しかし、この結果を惹き起すには必ずしも紙幣が使用されることは必要でない。貿易が自由であり一定量目及び一定品位の貴金属が貨幣もしくは貨幣の標準として使用される場合に流通したであらうよりも多額の磅を流通に留めさせるやうなもの、如何なる原因に依るものであっても、正確に同一の結果を生ぜしめるであらう。」(注1)

ところがリカードには次のような説明もある。

「何れかの特定の一国が製造工業に秀いで、その結果としてその国への貨幣流入を惹き起す場合には、その国に於ては他の何れの国に於けるよりも貨幣の価値は低く、穀物及び労働の価格は相対的に高いであらう。

このより高き貨幣価値は為替相場によつては表示されぬであらう。穀物及び労働の価格は、一国に於て他国よりも一割、二割若しくは三割高くても、手形は引続き平価を以て授受されるであらう。」

「各国が各々正しく当然有すべき量の貨幣を有する場合には、貨幣は多くの商品に対しては五歩、一割、否な二割も異なることがあり得るのであるから、その価値は成程各国に於て同一ではないが、しかし為替相場は平価通りであらう。」

「為替相場を論じ、諸国に於ける貨幣の比較的価値を論ずるに當つては、われわれは決して何れの国に於ても、その商品で測られた貨幣価値を証拠にしてはならない。」

以上の引用のうち最初の引用に現われているリカードの見解は、カッセル及びその流れを汲む学者の購買力平価説に於ける根本観念と一致するかの如く考えられるものであるが、その他の引用に示されるリカードの見解は購買力平価説の根本観念とは相容れないものと考えられるのである。このようにリカードの為替理論に於ては、相互に矛盾すると思われるような二つの見解が提示されて

替均衡と各国に於ける一般物価水準の均等とが両立しないことを指摘しているのである。リカードがここに言うところの金本位制度下の国際均衡状態に於ける各国の貨幣価値の相違、一般物価水準の相違は、貿易の変動と金の国際的移動に依つて惹き起された各国国民経済の総体的調整の結果として発生しているのであって、「事物自然の順序」なのである。したがつてこのように各国に於ける貨幣価値の相違、一般物価水準の変化を一時的過渡的な事態と解釈することは正しくないであらう。このように解釈することは、リカードがここで説くところを購買力平価説の命題と両立させようとする見解への端緒を開くものであるが、リカードがここで指摘していることは購買力平価説の命題とは全く相容れない。

次に、右のリカードの最初の引用の内容はどのように解釈すべきか。リカードの理論によれば、金の国際的移動の自由があれば、上述のような国際均衡状態に到達するが、金の国際的移動が阻止されるようなことがあれば為替相場は金平価とは一致しない。

「為替相場は製造工業に秀いでた国に、その穀物及び労働の価格を騰貴させるだけの充分な貨幣量が輸入される場合にのみ平価通りでありうる。もしも諸外国が貨幣の輸出を禁止し、且つよく斯る法律の違奉を強制しうるならば、洵に製造工業国の穀物及び労働の価格の騰貴を防ぐことも出来よう。蓋し紙幣が使用されぬものとすれば、斯る騰貴は貴金属流入の曉に始めて起りうるからである。しかし、これ等諸国は為替相場が自国に非常に不

いるのであって、このことが、従来リカードの為替理論の明確な理解を妨げてきた原因となつていよう考えられる。このような相互に矛盾せるものの如く考えられる二つの見解はどのように理解されるべきか、に關しては、為替理論に於て従来しばしば考察の対象としてとりあげられてきたものの、未だ明確な解決が与えられてはいないように思われる。だが、この問題は上述せる国際均衡論との関連において考察するならば、直ちに解決することが可能であらう。リカードの国際均衡状態——第七表——に於ては、輸出入の對象となる国際商品の価格水準が均等となり、貿易均衡が成立し、為替相場は金平価に一致している。しかし各国に於ける貨幣の価値は変化し、それと共に賃銀率も一般商品価格も変化しているのである。すなわち、生産に改良が行われ金の流入をみたイギリスに於ては、本位貨幣(ポンド)の価値は、金流入前には二・二人の労働量に相当していたが、第七表の均衡状態では二・一人の労働量に相当するにすぎず、これと共に賃銀率はポンドからポンドに騰貴し、一般国内商品価格も同一率で騰貴している。金の流出をみたポルトガルではもちろんこれと反対に、貨幣価値の騰貴、賃銀率及び一般国内商品価格の低下が生じている。リカードの説く国際均衡状態では、為替相場は金平価に一致しているが、貨幣価値の変化により、国内物価水準は各国に於て均等ではない。このような国際均衡状態を表現したのが、右のリカードの第二、第三及び第四の引用文の内容なのである。これらの引用文の内容はいずれも同一であり、為

利となることを防ぎ得ぬであらう。かりにイギリスが製造国であつて、且つ貨幣の輸入防止が可能であつたならば、対フランス、対オランダ及び対スペインの為替相場は、五歩、一割あるいは二割、これ等諸国に不利となるであらう。

苟も貨幣の流動が強い差止められ、貨幣がその正当の水準に落着くことを妨げられている場合には、常に為替相場の変動には際限がない。その結果は所持者の随意には正金と兌換されぬ紙幣が流通を強制された場合に起るものと同様である。」

金本位制度下に於ては、金の国際的移動が基軸となつて国際均衡が成立するが、その均衡状態に於ては、「各国は各々正しく当然有すべき量の貨幣を有する」ことになるのだが、金の国際的移動が禁止される場合には、ここにリカードのいわゆる「通貨の相対的過剩」が発生し、当該国に於て貨幣の比較的価値の低下となるから、その程度迄均衡為替相場の基準は金平価から乖離することになるであらう。金に兌換されない紙幣が強制的に流通に投じられる場合にも、その量が正しく有すべき量を超過するならば、事態は同様であらう。この場合には貨幣価値と金の価値との間に乖離が生じ金の貨幣価値は製造価格以上に騰貴する。この金の価格の騰貴の程度が貨幣価値が金の価値より減価した程度を正確に示す指標であるとすれば、この程度迄為替相場は金平価から乖離した水準に決定されることになる。いずれの場合も貨幣の比較的価値の低下が対内的な原因により一方的に発生し、これが為替相場の調整に依つて対外的に均

衡せしめられるのである。相違は前者の場合には、対内的には金本位であり貨幣の価値と金の価値とは均等であるが、後者の場合は紙幣本位であって貨幣の価値と金の価値とが乖離するということだけである。われわれがさきに見たりカアドオからの四つの引用文のうち、最初の引用文に於てリカアドオが述べている内容はこの後者の場合と一致する。この場合には形式的に考えれば、紙幣の流通数量に比例して為替相場は不利になるのであるから、カッセルの購買力平価説の根本概念と全く一致するように考えられもするし又多くの学者によってそのように指摘されている。しかし、リカアドオの理論に於ては、この場合にも、単に不換紙幣のみを考え、不換紙幣の増加↓物価水準の騰貴↓為替相場の下落といった単純な関係のみをリカアドオは考えていたのではなくて、彼は相異なる価値体系の連結環である金平価を常に考えており、この金平価との関連に於て貨幣の減価、為替相場の変化がとりあげられていたことに注意すべきである。上述せる国際均衡論から明らかのように、リカアドオの理論に於ては、金の国際的移動により金(貨幣)の實質的価値が——

換言すれば、金平価を媒介として関係づけられる貿易当事国間の価値体系の實質的關係が——適当な水準に迄変更されることに依つて国際均衡が成立し為替相場は金平価に一致することになるのである(注9)。金の移動が阻止されていたり、不換紙幣が流通している場合には、このような各国の価値体系の實質的關係を相互に調整することは不可能であり、この場合には各国の価値体系の實質的關係の変

更は各国民経済の総体的調整に依つてでなく為替相場の変更に依つて対外的のみ実現されるのである。

このように考えれば、さきのリカアドオの四つの引用文の内容はリカアドオの根本的な立場から一貫して導かれる見解であつて、リカアドオの理論的立場の矛盾と解すべきではない。そしてこのような結論はリカアドオの国際均衡論との関連に於てリカアドオの外国為替理論を考察することから当然導かれることである。

(注1) Ricardo, Principles, pp. 214—5. 小泉氏訳 上巻二四一—二頁。

(注2) Ricardo, Principles, p. 127. 小泉氏訳 上巻一四六頁。

(注3) Ricardo, Principles, p. 128. 小泉氏訳 上巻一四七頁。

(注4) Ricardo, Principles, p. 128. 小泉氏訳 上巻一四七頁。

(注5) リカアドオはその為替理論に於て後年のカッセルの購買力平価説の根本概念と一致する見解をとっている、ということは多くの学者によって指摘され承認されている。ところが本文中の引用に明らかになりにリカアドオの為替理論には明らかに購買力平価説の根本的命題と一致しないと考えられる叙述がある。この点に關して多くの学者の見解は大体に於て次の二つの見解に分れる。その一つは、このような叙述は明らかに購買力平価説の根本概念と一致しないと考えたりカアドオの為替理論は理論的に矛盾しているとする見解、もう一つはこのような叙述も必ずしも購買力平価

説の根本命題と抵触するものでないとする見解である。結論を先に言うならば、リカアドオの国際均衡論との関連に於て考察するならば、右の二つの見解はいずれも不十分な見解のように考えられる。

(注6) リカアドオは世界各国に於ける貨幣の比較的価値の相違を生ぜしめる原因のうち、最も重要なものとして製造工業に秀いで生産能率の高い国への金の流入を強調し、このようにして発生する貨幣の比較的価値の相違、一般物価水準の相違を事物の自然の順序である、とのべている。ところがリカアドオの貨幣の比較的価値の相違の原因を、右のように解しないで、一時的過渡的な事情、乃至は制度的な事情に帰せしめる見解がある。例えば、カッセルやエンゲルの見解を見よ。G. Cassel, Money and Foreign Exchange after 1914, p. 172. J. W. Angell, The Theory of International Prices, pp. 68—9. (注7) もしもリカアドオの理論に於て貨幣の比較的価値の相違の

原因を(注6)の如く、商品の輸送費用(エンゲル)とか、輸出上の一時的容易さ(カッセル)といった問題に帰せしめるならば、このような原因にもとづく各国の貨幣の比較的価値の相違、したがつて一般物価水準の相違は理論上本質的のものとは考えられなくなり、リカアドオの説くところは購買力平価説の根本問題とは必ずしも抵触しないと考えられることになる。このような見解については、Cassel, *ibid.*, p. 172. 田中金司氏「金本位制の回顧と展望」一六〇—二頁。

(注8) Ricardo, Principles, p. 127—8. 小泉氏訳 上巻一四六頁。

(注9) 金平価を媒介として見出されるイギリス及びポルトガル間の実質的關係——生産要素交易条件——は第四表の状態では二・二人対一・七人であったが第七表では二・一三人対一・八五人に変化している。このような両国に於ける価値体系の實質的關係の変化がリカアドオの均衡化の主要要因である。